慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エルンスト・トレルチの政治思想
Sub Title	Political thought of E. Troeltsch
Author	多田, 真鋤 (Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.12 (1964. 12) ,p.289- 311
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	板倉卓造先生追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19641215-0289

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エルンスト・トレルチの政治思想

多田真鋤

一

ワイマール共和国に関しての考察は、従来いろいろの視角のもとに行われてきている。ナチス「第三帝国」の評価と解明に際してむけられると同様に、「ワイマール共和国」もその一般的考察に際しては、すべてドイツ政治史の性格と意味との関連にむけられる。それとともに、ドイツと西欧世界との間の政治的、精神史的関連にむけられ、その場合においてはすぐれて歴史哲学的考察がなされる傾向にある。すなわち、このワイマール共和国の一四年間の時代を、君主制と独裁制との間の幕合劇として把握するかどうか、その共和制的民主政の成果に力点をおくか、あるいはまたその挫折に力点をおくかどうか、一九一八年から一九三三年までの期間を、潜在的な内戦状態の時期とみなすか、あるいはワイマール時代の精神的豊饒に意義をみいだすかどうか、またこの時代を取扱う場合には、その初期と中期と末期のどの時期に注目するのかといつたことによつて、それぞれ多種多様な結論に到達することになろう。

さて、本稿においては、ワイマール共和国の出現に際して、著名な宗教、歴史哲学者であるエルンスト・トレルチ（Ernst

Troeltsch）が、この共和国に対していかなる精神的、政治的見地に立ち、どのように評価していたかを、トレルチの若干の論説を対象として考察してみたいと考える。(1)

トレルチは、その政治理念をこの拙稿でとくに問題視する一九一八年以後は、フリードリッヒ・マイネッケ、マックス・ウェーバー、フリードリッヒ・ナウマンおよびワルター・ラテナウらの政治思想ときわめて近い立場に立つている。しかし、トレルチがいつごろから実際上の政治問題に対して関心を抱き、それに関与しはじめたかについては、その時期をあまり明瞭に確認することは不可能である。トレルチは自らその自伝的小論ともいうべき「わが著書」（Meine Bücher）において、回想的に「社会政策の実際的課題、政治的・社会的事情に関する省察、ドイツ人としては全く遅いが、政治的問題への覚醒」(2)について語つているが、彼は一九〇四年には、政治に積極的に参加するようにとのマックス・ウェーバーの要請を、まだ彼の精神的問題性にとつて特徴的な次のような理由によつて拒絶している。すなわち「私は自由主義の政治理念に多面的な共感を抱いているにもかかわらず、私は自由主義者ではない。その根本的理由は、私のキリスト教信仰と、政治思想に対するそれの影響からである。」(3)という理由によつてである。マリアンネ・ウェーバーは、ハイデルベルク時代のトレルチは、政治にはあまり興味をもたず、むしろ保守的な国民自由主義者で、彼女の女権論的関心や努力には全く冷淡な態度であつたことを指摘している。(4)

しかし、トレルチは、一九〇九年から一九一四年にいたる六年間を、大学代表として、バーデン州第一議会のメンバーとして議会活動に従事している。そこで彼は、彼自ら記述しているように政治問題に関与するとともに、たとえトレルチの表面上の寄与がすぐれて彼の狭い専門分野に限定されているにせよ、ある程度まで政治教育事業に従事もしたのである。

トレルチが彼の多くの同僚たちと同様に、政治・時局問題に対して言論と文筆で積極的に参加し、その見解と立場を鮮明にするに至つたのは、第一次世界大戦の勃発に際してであつた。因みにこの世界大戦の開戦に際して示した、ドイツ政界の

状況を少しく詳しく述べておいてみよう。一九一四年八月四日にドイツ帝国議会が開かれ、全政党は超党派的に一致して政府の戦争予算に賛意を表した。当日、カイザー・ウイルヘルム二世は全議員に対して次のように演説している。「私は重い心を懐いてわが軍隊を隣国中の一国（ロシア）に対して動員したが、ロシアとわが国は実に数多くの戦場で味方として戦ってきたのである。……われわれは征服欲をもたない。自分らのため、また後の世代のすべての者のために、神がわれわれのために定めた土地を守ろうという不屈の意志がわれわれをはげましている。……諸君、諸君は私がこの王宮のバルコンから国民に話した言葉を読まれたことであろう。ここでその言葉をくり返す。『私はもはや政党なるものを知らない。私の知っているのはただドイツ人のみである！』諸君が政党、種族、宗派の別なく、私と共に、困苦を凌ぎ、窮乏と死に耐えて、最後まで持ちこたえることを固く決心している証拠として、私は各政党の首脳部が前にすすみ出て、誓を立てることを求める。」といい、各党首脳はこの宣言にたいして満腔の賛意を表したのであつた。このウイルヘルム二世の演説にひきつづいて帝国議会は開催され、そこで宰相ベートマンは次のように所信を披瀝している。「……諸君、われわれは今や正当防衛の状態にある。そして必要は誠を知らない。わが軍はルクセンブルクを占領した。そして多分すでに、ベルギー領に踏み込んでいることであろう。諸君、これは国際法の規定に違反している。フランス政府はなるほどブリュッセルで次のように声明している。『敵側がベルギーの中立を尊重する限り、フランスもそれを尊重する積りである』と。しかし、われわれはフランスが侵入の準備をしていたことを知つていた。フランスは待つことができたが、われわれは待てなかつたのである。ライン河下流のわが軍の側面にフランス軍が侵入したならば危険きわまる事態となつたであろう。そこでわれわれは、ルクセンブルクとベルギー政府の正当な理由のある抗議を無視せざるをえなくなつたのである。この過失――私は卒直にいうが――われわれが犯した過失は、軍事上の目的が達成された際に、直ちに賠償するつもりである。われわれの如くに脅かされ、そして最も高貴なもののために戦っている者だけが、いかにして血路を開くかを考えることを許される！……」と。しからばドイツ

社会民主党の立場はどうであつたかというに、反戦を主張したカール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルク、フランツ・メーリングのような、少数の反対派も存在はしたが、社会民主党の代表者ハーゼは次のような著名な演説を行つて戦争予算に賛成したのである。「……われわれは運命的瞬間に直面している。帝国主義的政策の結果、軍備競争の時代が惹起され、諸民族の対立が激化したが、その結果は津波のように全ヨーロッパに流入して来た。その責任はこの政策を遂行した者が負うべきであり、われわれは責任を拒否する。……われらの努力は無駄となつたのである。今やわれわれは戦争という鉄石の如き事実に直面している。……今日われわれが決定すべきことは戦争に賛成するか反対するかではなくて、国土の防衛に必要な手段についてである。……その計り知れない困窮を軽減することがわれわれの無条件の義務であると考える。わが人民とその自由な将来とはロシア専制政治が勝利した暁にはたとえ全く絶望ではないにしても非常に危険となる。……この危険に対して防禦し、われら自身の国土の文化と独立を確保せねばならない。ゆえにわれわれは常に強調して来たこと――危急の際には自分の祖国を見棄てない――を実行する。……われわれは次のことを要求する。――自国の安全という目的が達せられ、敵国側が平和を求めはじめるや否や、諸隣国との友好を可能にするごとき平和を結ぶことによつて、戦争を止めるべきことを、単に常に擁護して来た国際的連帯性のために要求するのみならず、ドイツ民族のためにも要求する。」[5]と述べたのであつた。以上が、第一次世界大戦の開戦に際してのドイツ政界の各指導層がとつた態度であつた。このような状況に囲まれて、トレルチはいかなる政治的見解を持ち、その態度を決定したかをまず当初に考察してみよう。

(1) 本稿執筆に際しては、Eric C. Kollman; Eine Diagnose der Weimarer Republik, Ernst Troeltschs Politische Anschauungen, in: Historische Zeitschrift. Band 182 Heft 2. 1956. ならびに Hans Kohn; The Mind of Germany, The Education of a Nation, 1961 ならびに Friedrich Meinecke; Ernst Troeltsch, in: Zur Theorie und Philosophie der Geschichte, 1959 等を主として参照した。

(2) Ernst Troeltsch; Meine Bücher, in: Gesammelte Schriften. Bd IV. S. 11.

(3) Walther Koehler; Ernst Troeltsch. 1941, S. 292

(4) Marianne Weber; Max Weber, Ein Lebensbild. 1926. S. 240 f.
(5) Dokumente der deutschen Politik und Geschichte von 1848 bis zur Gegenwart, II. S. 295 ff. なお引用文は、すべて「西洋史料集成」七九三―七九四頁の村瀬興雄教授担当の項目を参照した。

二

すでに一九一四年八月二日附の最初の公開講演「動員発令後に」(Nach Erklärung der Mobilmachung) においては、僅かな例外を除いて、トレルチが第一次世界大戦中に堅持したその基本的態度がとられ、その立場が主張せられている。彼は大戦の勃発のもたらした文化状況の悲劇性に震撼させられたのであつて、ドイツの状態の危険性とか、近代戦争のイリュージョンの性格に動かされたのでもなかつた。

「非理性 (Unvernunft) と罪業 (Bosheit) の、憎悪 (Hasse) と羨望 (Neid) の焔が大地から吹き出し、全人間文化は活火山の上におかれた一軒の家にひとしいことをわれわれに想起させた。」[1]「存在と生は、今や危機に瀕している。」[2]という。彼はまた「Hubertusburg の平和」を目的とする。すなわち、すでに獲得されたものの防衛である。ドイツの戦争目的は、全く防衛的で、且つ自由主義的性格のものとして規定づけられる。すなわち、ツアー絶対主義からの自由であり、ドイツ市民のための内的自由の擁護としてである。すでにこの論説においてトレルチの政治思想にとつて特徴的なドイツ国内の二陣営の妥協への要求があらわれている。すなわち、規律の必要の承認と、労働者、農民による強力な中央集権的指導の承認、ならびに大衆こそは祖国を防衛し、それゆえ、より大きな政治的自由に対する権利をもつところの都市と農村における活動者であることを、支配階級が承認することである。

トレルチはドイツ陸軍と国防軍において、国民統合のシンボルをみようとする。「この軍隊の性格の中には、かかる戦争

のありうべき目標が包蔵されている。この軍隊によつてはいかなる世界征服も、いかなる冒険的政策もありえない。この軍隊によつてはただ自己保存と、自己確保のみがあり、この戦争の道義的収得物すべてを、自国の内政的生活の持続的発展と深化に転換せしめようとする意志があるだけである。[3]」という。

第一次世界大戦のトレルチの政治論説については、一般に他の多くの同僚に比較してより冷静な調子を堅持しているといわれるが、それでも憎悪や斜視的判断から全くまぬがれてはいないことが指摘されている。トレルチのように印象をうけ易く、エモーショナルな精神は、当然なこととして両陣営の彼の同業者の多くのように、戦時中の「世論の環境」(Climate of opinion) から自由であるわけにはゆかなかつたのである。しかし、客観性を希求する徹底したその努力は認められるべきであり、また彼とドイツの彼の同僚たちとを比較した場合、戦争時事問題に関する限りは彼はほぼ中庸の立場を堅持し、フェルスター (Foerster) やシェーファー (Schäfer) やレーテ (Roethe) などからは一層距離をおいた立場にたつていた。トレルチがその戦争論説で本質的に固執した線は、マイネッケや彼と意見を同じくする人々にも見出される線と合致した立場であつた。

「了解に基づく平和」を支持するほとんどすべての人々と同様に、トレルチにとつても主要な敵はロシアであつて、イギリスではなかつた。この点、さきにかかげたドイツ社会民主党の指導者ハーゼの演説の中にあるように、ドイツ国民の自由と将来のためにロシアを危険視し、ドイツ文化の擁護のためにもロシアを敵視した見方と基本的に一致している。トレルチにあつては対外的拡張論は全体としてかなり弱く、彼の立場上当然のことながらとくに文化・政治問題に没頭した。

現代的術語を以てするならば、合理化 (Rationalisierung) という問題に彼の主たる関心事があつた。そのため彼は、ラテナウやウェーバーなどよりもはるかに強く、危険にさらされているドイツのために、地政学的見地からドイツ政治構造の正当化を強く主張する。

彼は彼を深く不安ならしめた連合国の文化戦争を、敵の攻撃戦争のための無花果の葉と表現することによつて説明しようとする。

一九一六年に行つた「一九一四年の理念」という課題の演説において、「世界戦争はまず第一に、しばしば荘重な超理想主義者が望んでいるような、精神や文化対立の戦争では全くない。世界戦争は二、三の強国のもとで行われる地球の分割と、ドイツの競争を抑圧しようとする要求から生じた帝国主義的世界緊張の結果なのである……それは権力と生活をめぐる問題なのであつて、その他のものは一切問題ではなかつた。なかんずくわれわれ自身は当初にそのように感じていた。なぜなら、問題なのはわれわれの実存なのであつて、他の国民のそれではなかつたからである。敵もひたすら道徳的に有効な戦争標語（Kriegsparole）を欲し、ドイツ精神自体に対する戦いは全く考えてもいなかつた。」しかるに、「生存闘争においては、生活とともに精神も問題となつた。……敵はわれわれの最初の成果に対してかれらの戦争標語をすばやく継続して全近代ドイツ精神を追放しようとし、誹謗、非難、戯画をわれわれの上に集中的にふりそそいだ。帝国主義的権力戦争だつたものは、かくして精神および性格の戦争と化したのである。自己把握はただちにそれ自身反抗や精神力の手段と化し、これらの力に充ちて、ドイツ民族は限りない抵抗力をかちえたのである。[4]」と第一次世界大戦の担う文化戦争的特徴を指摘している。彼はドイツ国民が敵の諸国民を内面的に理解しうるのにたいして、敵側はドイツ国民を内的に理解しえないと考える。

そして、トレルチは、ドイツは小民族の自由の体制のためにイギリス化やロシア化にたいして、その民族的個性を救済するために戦うのであるという見解に組するのである。

そして彼は、ドイツ陸軍の二重性格、すなわち、プロシア的刻印をもつ封建的将校団と、都市および農村の大衆とからなるその組織から必然の結果として美徳が生ずるという。

「勿論、このことは……単にドイツ人の道徳的優越、道義的卓越性によるものではない。ドイツ民族の社会的・政治的発

展状態に、この事態の根拠はある。ドイツは封建的・貴族的・家長権的社会構成から、個人主義的・民主主義的社会構成へ移行過程にあるものと理解される。この移行過程の状況が、両発展段階の長所を統一することを、われわれに許すのである。その両者、すなわち封建的・貴族主義的なものと、個人・民主主義的なものとが、ドイツ陸軍におけるほど輝かしく効果的に統合されているところはどこにもない。……ドイツ陸軍は、貴族主義的規律と、統率術と組織力とを、国民全体の打撃力および義務感とに結びあわせる。すなわち、規律と貴族主義、権威と自由とを統一する場なのである。[5]」

トレルチのこの文章は、彼の倫理的見地と政治・歴史的見地との統一のゆえに、さらにまた総合と妥協を求める努力のゆえにも特徴的である。

大戦中の彼の政治談話や著述は、本質的に二つのテーマによつて貫かれている。

第一は、彼を悲痛に震撼させた文化戦争があげられる。これは彼をして、西欧世界との絶えざる自己論議へ、ドイツ精神と西欧との比較へ、さらにまたドイツ的なるものの本質の深い省察と探究へと駆りたてたものであつた。トレルチがとりあげた第二のテーマは、ドイツの戦争諸目的である。彼は一九一五年一月に発表した「帝国主義」に関する論説において示した態度を、原則的に全戦争過程を通じて堅持したのであつた。この論説において彼は、帝国主義に関する深い歴史的・政治的分析と、さらにドイツ帝国主義政策の弁護者側と反対者側の主張を検討しながら、ドイツの帝国主義政策には、現実政治的前提が存在しえないという結論に到達するのである。ドイツはその内政的状態からみても、移住植民地を創り出しそれを確保することは望みえないし、また大勝利の場合にでさえも、ヨーロッパにおける領土の強力な拡大は考えられえないとする。「ドイツの土地、もしくはドイツと継続する土地の上に、ドイツ人の余剰部分を移植しようというような希望を、われわれは去らなければならない。……巨大なロシアはいかなる状況のもとでも、ヨーロッパの大強国でありつづけ、われわれに対して、決して除かれることのない圧力を行使するであろう。[6]」権力に基づく帝国主義にかわる精神の帝国主義もまた、トレ

ルチにとつては疑わしいものとして映ずる。「アングロサクソンとロシアに対して、われわれはつねにより小さな部分でありつづけることであろうし、精神の面でも一方は過去を保存し、他方は未来志向の精神を抱懐しているこの二つの文化を、われわれは押しのけ、とり除くようないかなる欲求ももたない。われわれは、ただ自分自身を価値づけ、われわれの生命力を現実化しようと欲するだけである。」[7] 彼にとつてはさらに道義的見地からしても、ドイツの帝国主義は正当化されえない。「人は一般に、政治において道義と理想主義について語ろうと欲する時にのみ、あらゆる偉大な独自の精神的深さを所有する民族的個性の生命力を承認し、すべての民族に彼らと共存することを他に許容するところの自己限定を要求する可能性が存在する。……生き生きとした、ともかくも理解しあつた民族的諸個性を一つの統一的組織にするという理想は、主導的に働きつづけなければならない。……同様に、政治的道義性も存在しなければならない。マキアヴェリズムは異端の教義である。」といい、そしてさらに「同様に、ドイツの政治的理想主義の倫理は、国民の偉大さのための犠牲、英雄的意志と闘争精神、高邁と誇りこそが道義的価値である、とする教義に対立するものである。すなわち、自己目的ではなく、無限に巨大に膨脹し国民的道義性の最高の理想にしたてあげられるべき性質のものではないということである」[8] と述べているが、ワイマール共和国末期のドイツでは、トレルチの警告にもかかわらず、ナチズムによる民族精神・文化・道義の無限の昂揚へと国民は駆りたてられたのであつた。

(1) Ernst Troeltsch; Nach Erklärung der Mobilmachung. 1914, S. 5.
(2) E. Troeltsch; a. a. O. S. 11
(3) E. Troeltsch; Unser Volksheer, 1914, S. 9 f
(4) E. Troeltsch; Deutscher Geist und Westeuropa. Gesammelte kulturphilosophische Aufsätze und Reden. Herausgegeben von Hans Baron, 1925, S. 31.
(5) E. Troeltsch; Unser Volksheer, a. a. O S. 13.

（6）E. Troeltsch; Die Neue Rundschau, 1915, S. 8.
（7）E. Troeltsch; a. a. O. S. 10.
（8）E Troeltsch; a. a. O. S. 12.

三

トレルチが帝国主義に関するその論文を著わしてほどなく、ベルリンへ移住し、戦争目的をめぐる論議が活潑化したときに、マイネッケ、デルブリュック、ヘルクナーの諸学者とともに、「了解による平和」の側に参加したことは彼の以上の政治観から考えて当然のことであつたといえる。そして彼は、一九一五年七月に、デルブリュックその他の協力のもとに、テオドール・ヴォルフによつて起草された帝国宰相あての請願書に、署名者の一人として名前をつらねた。

この請願書は、併合主義的な立場を主張する「独立者委員会」(Komitee der Unabhängigen) に反対する意図を表明したもので、政治的に独立した諸国民に対するいかなる併呑、併合にも反対することを主張したものであつた。祖国党（Vaterlandspartei) に対抗して、一九一七年の晩秋に設立された「自由と祖国のための国民同盟」(Volksbundes für Freiheit und Vaterland) の組織において、トレルチは主導的役割を演じ、その前衛的幹部とさえもなつた。この組織の創設に関する演説の中で、彼は思想家の動員解除を要求したが、そのことによつて右翼陣営から多くの敵視を招いた。一九一六年に恐らくナウマンの中欧構想の影響によつてであろうが、中欧 (Mitteleuropa) のブロック化を提唱した。

すなわち、トレルチは次のように構想する。「ドイツ帝国主義は、われわれにとつては多くの理由で、就中、地政学上や人口上の理由で不可能なことである。しかし、われわれにとつて中欧ブロックの形成は可能なものであると思われる。すなわち、脅威をうけているものや、併呑されたものすべてを、このようなブロックに編成することをわれわれは期待すること

ができるし、このようなブロックはドイツの政治的・軍事的、科学的・技術的、倫理的・精神的文化に根本的に基盤を有しているであろう。このブロックはわれわれに従来の世界貿易を補充することは望みえないが、政治的・軍事的・地理的勢力の基礎をつくることはできるのであつて、このような勢力の基礎からわれわれは、大きな世界分割に際して併呑されずに、かえつて小国の強力な同盟体制において巨大国の熱望した独占的地位を打破することを期待することができるであろう。それが到達されるかどうかは将来の大問題であり、われわれとしては軽卒に、単純にこれを肯定しようとは思わない。しかし、それはわれわれが最近数年間に、概してなんらの政治理念ももたず、またもちえなかつたのであるから、われわれの行動に明晰、目標、活気を与えうる一つの政治理念であるであろう。[1]」と述べ、さらに次のように続けていう。「この政治理念が同時にわれわれの古い政治的・倫理的思想と同じ次元にあることは重要である。世界支配とか権力・独占政治ではなくして、各個人の同時的な独立した発展における、国民精神の自由な相互補足がそれである。フィヒテはこの理想をかつて極めて抽象的に、ナポレオンの専制政治に対して世界および人類のために定義した。今日にいたつてわれわれは漸く政治的現実およびその利害と関連して、このような理想の明確な実現の可能性を有している。われわれの創設しなければならない中欧ブロックを、われわれはこの意味で考えることができるし、また考えなければならない。そして、おそらくわれわれは、このような政治理念は広く世界に有益な影響をもつことができ、地球を独占的大国への分割と、これらの強国相互の恐ろしい最初の世界戦争から救うという希望を抱懐してもよいであろう。これはもはや単にヨーロッパ列強の勢力均衡ではなくして、世界的列強の勢力均衡の理念なのであつて、国民の個性をイギリス化やロシア化の害から保護する政治綱領的理念でもある。[2]」といい、さらに「このようなブロックは、勿論ある意味ではドイツの指導を意味するけれども、なんらドイツの支配を意味するものではない。そして、この『指導』も就中精神的業績と、政治的・倫理的な力とに基礎づけられなくてはならない。[3]」と述べ、トレルチはその中欧ブロックの構想を、あくまでも非権力主義的、非帝国主義的、非侵略的にして、精神・

文化主義的、防衛的性質のものとして規定しようとするのである。

戦争が長びくにつれて、国内改革の必要はますます力説されるようになる。一九一八年五月にはトレルチは次のように述べている。「官僚行政によつて統治されているわが国民の心理状態において、怠惰性と屈従性が根をはり、それが安定と力を生みだすことを阻害している。その安定と力こそが、外国人たちに対して、なんらかの世界政策への能力を示し、数多くの政治指導者を育成する原動力であるにもかかわらずにである。安定と力やそれらがもたらすことのすべてが、あらゆる世界政策の前提であり、またそれらが国内改革や大衆の積極的な態度と密着されるものである。[4]」という。このドイツ内外の状態に関するトレルチの憂慮は、ほぼ同じ時期にマルチン・ラーデ(Martin Rade)にあてた長い私信の中でも示されている。その手紙の中で、彼は彼の純粋な義務感から従事しているところの「国民同盟」にたいする支持を緊急に要請する。「国民同盟の設置は、一つの道義的、政治的立場をもつてする（とりわけ、諸外国を考慮にいれて）宣伝団体を創ろうというグラボウスキーとマイネッケと私の願望から始つたものです。つまりそれは、キリスト教的労働組合を伴うわけですが、それというのも国民の鼓舞と慰めのためにそれが必要とみなされるからです。労働運動の指導者たちは、革命を――飢餓、暴動、虚脱を恐れています。その他の組織も国民同盟に賛成しており、従つてこの同盟にとつては、内政、選挙権、議会政治が問題なのです。カトリックは感動して協力し、プロテスタントは『感傷性』にとどまつて、わずかな要求に逃げこんでいます。プロテスタント派では、戦争神学、および民族的人物としてのルターをもち出して、大胆な併合政策が支配しています。このような状況のもとでは、同盟は道徳的な了解による政治問題に関して、重要な武器となるでしょう。……祖国党は、ルーデンドルフとのつながりによつて恐るべき荒廃作用をもたらしています。それは一種の階級政党であり、保守主義者たちの全社会的影響力と重工業の金力を以て活動しています。一方にとつては、ルーデンドルフが表明しているように『勝利を、完全な勝利の享受を！』が問題であり、他方にとつては、内敵の打倒と、来るべき租税の重圧を和らげてくれる戦時補償が問題

というわけです。……情勢はおそろしく深刻です。私は一人の内閣秘書官を知っていますが、彼は言っていました。『私は未来に絶望しています。外国ではみんながドイツの困難を知っていますが、知らないのはただわが国民だけです』と。」[5]このトレルチの手紙でも分るように、彼は刻々と悪化してゆくドイツ帝国の状態に関していささかの希望ももっていなかったのである。

(1)(2) E. Troeltsch; Deutscher Geist und Westeuropa, S. S. 52-53.
(3) E. Troeltsch; a. a. O. S. 55.
(4) E. Troeltsch; „Anklagen auf Defatismus,' in: Eric C. Kollman; a. a O. S. 300.
(5) Johannes Rathje; Die Welt des freien Protestantismus, 1952, S. 256 f., in: Eric C. Kollman; a. a. O. S. 301.

四

「観察者の書簡」(Spektator-Briefe, Aufsätze über die deutsche Revolution und die Weltpolitik 1918-1922.) は、ウイルヘルムの帝国ドイツ没落以後の、トレルチの本格的な政治著作の代表的なものである。それは、ワイマール共和国宣言の数日後、すなわち、一九一八年一一月に書かれた「軍国主義の終焉」(Das Ende des Militarismus) を以て始り、一九二三年二月一日におけるトレルチの突然の死の三カ月前、すなわち一九二二年一〇月に書かれた、「共和国」(Die Republik) についての論説で終っている。トレルチは、ワイマール共和国が成立すると、ベルリン大学に奉職する傍ら、文部省にも出て、一九一九年には副国務書記官、二二年には書記官長になっている。敗戦後のドイツの困難と混乱を座視するにしのびず、政治的世界に進んだのであるといえよう。こうした戦後の政治の動きを、自ら観察し論評したのがこの「観察者の書簡」であり、彼が、フェルジナンド・アヴェナリウス (Ferdinand Avenarius) の編集する「クンストワルト」(Kunstwart) 誌上に掲載した数多くの政治論説を集めて一書にまとめられたものである。この「観察者の書簡」について、トレルチ自らは次のように語っている。すなわち、「こ

の書簡は、その時々に事象の瞬間的な像を与えようとするもので、数多の情報、会話、警告、体験、新聞、およびパンフレットなどから探り集められたものである。またこれは、事態の成行きを推測したり、修正したり、または政治的行動の目標を提起するというような野心は全くもたないものである。」[1]といつている。しかし、トレルチは瞬間を、内容豊かな歴史的発展の関連のなかで把握するという独特な能力をもち、また反対に、瞬間の力のなかに、あらゆる歴史の本来的な秘密を洞察する能力をもつ学者であつたから、「観察者の書簡」は、読者の眼に歴史的構造を、いわば、出来事の現象学と形態学をあらわしてみせる発展的、総括的把握が存在するものであるといえよう。

彼は、その時々の政治・社会問題を論評するにあたつて、政治の本質、ドイツの国際社会における位置、世界状勢の全般に関して、全く一定の視野に立ち、さらにまた一九一八年から二二年にかけての激しい政治・社会状況の変化のうちにあつて、ワイマール共和国についての一つの確実な診断を与えているものである。すでにその最初の論説において、トレルチが戦時中に公表したものとは、全く本質的に異つている。その相違は、彼が一つの決断をくだしていること、すなわち、単なる解説に終らず、解明しているところに「観察者の書簡」の主要な特徴があるのである。

「軍国主義の政治体制は、戦争によつて望みないほどに打ち破られた。まず政治的・軍事的達成というその独自の領分においてであり、さらにその内的構造、すなわち将校団と兵隊たちとの関係に関してである。」[2]内政的には、それは「古い軍事的基盤の上に、軍部の援助によつて王政復古を実施することが不可能になつた」[3]ことを意味する。彼はいう「救いはただ純粋な民主主義によつてのみ行われる」と。対外的には敗北を承認し、それを運命と認め、世界政治に関してのドイツの役割は終つたことを洞察することである。彼はドイツのために、大きなスイスの役割を願望する。「現在のフランスの輝かしい強力さは、空虚であり虚偽のように思われる。すべてのヨーロッパ国家は、強大な世界政策・軍事政策を諦め、国際的な同盟政策を基盤としてその民族的構成による集合体を創設しなければならなくなるであろう。その場合、それは長期間のうち

に、ヨーロッパ外の列強によつて定められた枠のなかで、精神的、経済的勢力を育成しなければならなくなるであろう。フランスにとつてもまた、いずれは権力政策を断念しなければならないときが訪れるであろう。ヨーロッパの恢復は、権力政策を全関係諸国がいつ断念するかにかかつている。

私は思想を転向して、自らの信念の方向へむけよう。それ故、非英雄的であるとして、正真のプロシア精神からの攻撃をまぬがれがたいという危険をもおかして、それをここに書きつける。[4]」（一九二一年二月）といい、彼はドイツの再建にとつて唯一の文化的、政治的可能性として、ドイツ政治が西欧志向をなすよう指示したのである。「ボルシェビズムと連合国という相争う二つの世界体制を、相互に反目させるためには、われわれは余りに弱く、独自のイニシアティーブを余りにも奪われてしまつている。ボルシェビズムと連合国を対立させようとする政策は、わがドイツ文化の没落であり、国民の大多数からも非常な嫌悪で迎えられるであろう。かくて、西欧列強とともに歩み、同時にその無慈悲な威嚇と難題を、法的手段の行使によつて、世界道義へのアッピールによつて、狂気と威嚇のドグマとつねにあらたに戦うことによつて、ドイツだけが責任を負担することを可能な限り避けるようにすること、それより以外のいかなる方法も残されてはいない。[5]」

ボルシェビズムに関する長い基本的な論議（一九二〇年九月附）の中で、読者は次のように問いかけられる。「われわれの生活の長い歴史的基礎に潜在しているところの、東欧志向か、西欧志向かという古く且つ難解な問題を全く看過してしまつてよいのであろうか？[6]」と。

トレルチが一九二二年四月のドイツとロシア間に締結されたラッパロ条約を、単なる法的必要から生れたものであり、ドイツ側からすれば、経済的意味をもたなかつたという確認に重きをおいたことは当然のことであつた。いわゆる、ラッパロ条約のもつ意味として、ドイツのナショナリストが、ボルシェビストと提携、ないしは接近して、西欧諸国にたいするドイツの立場の強化を図つたと一般に指摘されているが、トレルチは、そのような見解としてラッパロ条約を解釈することに強

く反対した。「私自身としては、ただアングロサクソンの体制にのみ救済を見出しうるという考え方をおしすすめるものである。」[7]という。「観察者の書簡」の対外上のこのような路線の背景には、一九一八年から二二年に至る国際情勢の一連の分析が存在するのである。彼は、ヨーロッパから西と東への重心移動は決定的な傾向とみなし、また同じくアメリカの世界における権力的地位を確認している。そして、ワシントンにおける軍縮会議において、ヨーロッパと世界におけるイギリスの相対的な弱体化を認める。

敗戦後の国内政治として、ドイツに必要にして可能なものはなにかというに、トレルチはまず統一を確保することが一切のドイツ内政の至上命令であるとする。そこで、独立主義者たちや、時にはエルツベルガーを鋭く攻撃していたにもかかわらず、ヴェルサイユ条約を拒まずにはいられなかつた。ヴェルサイユ条約の拒否が、内戦や国内の部分的解体をもたらすかもしれないという多くの産業人や軍人の意見があつたにもかかわらず、彼はウェーバーやラテナウらとその態度をともにした。

さらにトレルチは、プロレタリヤ独裁の危険の除去にこそまさにワイマール共和国の性格と構造がもとづいているとみる。ワイマール共和国は、広汎な中道の上にもとづくものであり、それなくしては、憲法の維持も可能ではない。具体的には、それは労働者階級と市民階級との協力を意味するのであつて、いわゆるワイマール連合が実行したようなものであり、また一九二〇年六月選挙以来、社会民主党から人民党に至るまでの大連合がそれにあたる。それ以外ではワイマール共和国はよく統治されえないとする。「中道の破壊は、それゆえ、憲法と国家の危険を意味する。」[8]（一九二〇年一一月）ことを主張する。一年後の一九二一年一〇月七日附の論評でも「広汎な中道の新形成が積極的に達成されるべきである。われわれの絶望的な状態を救えるのは中道の形成によつてのみである。それは、左右両翼からなされる、臆病、無理念、凡庸といつた、この中道形成にたいするあらゆる嘲笑や悪罵にもかかわらず、重要な政治的行為であると信ずるものである。」[9]広汎な中道を形

成することのみが、ワイマール共和国の生命を維持しうるというこの確信から、トレルチは、一連の方向を指示する。すなわち、一方においては、社会民主党が階級闘争の原則を脇にのけることが肝要であり、他方、少くとも市民階級の大多数にとつては、復古的傾向を放棄して、共和国と民主主義を肯定することが肝要であるとする。国家の生存にとつて最も危険なことは、政治的諸力が二つの党派に分極化することであつて、そうなれば、極右と極左の周囲に政治力が結晶化されて、両者の間になんら妥協の余地がなくなり、ただ内戦の可能性のみを残すこととなる。それゆえ、階級対立を激化するような一切の政策は警戒しなければならないとする。また、トレルチは、ヴェルサイユ条約における賠償、責任問題やフランスの外交政策一般について疑問を抱く。すなわち、それらがドイツの右翼を強化するからである。そこで、まだ政治の中心から遠のいている広汎な市民階層が、共和国の基盤の上に立脚して、民主主義的・議会主義政治体制と和解することが緊急問題と考えるのである。広汎な市民政党を形成することが不可能であるときは、少くとも種々の市民的政党の間に、緊密な協力体制を確立する必要があるとする。

(1) Der Kunstwart, XXXXII/23 (I. Septemberheft 1919) S. 208, in: Eric C. Kollman, a. a. O. S. 302
(2) E. Troeltsch; Spektatorbriefe, 1924, S. 6 f.
(3) a. a. O. S. 11
(4) a. a. O. S. 173.
(5) a. a. O. S. 158 f.
(6) Der Kunstwart, XXXXIV/1 (Oktober 1920), in: Eric C. Kollman; a. a. O. S. 304.
(7) E Troeltsch; Spektatorbriefe, S. 271.
(8) a. a. O. S. 163.
(9) a. a. O. S 216.

五

以上述べてきたトレルチの対外政策や国内政策にたいする態度の背後には、政治の本質と民主主義的政党国家の性格に関する、一定の根本的見解、いわば彼の政治思想が伏在していることが指摘されなければならない。政治はトレルチにとつてもまた「可能なるものの技術」である。そして、「観察者の書簡」のすべてにわたつて、批判的なリアリズムが、健全な人間悟性が、イデオロギーの霧を破つてリアリティに到達しようとする努力がみちみちている。政治の本質は、彼にとつてはシュミットのいうような友敵関係ではなく、妥協の技術である。政治にたいする態度はプラグマティックであり、またイデオローグとイデオロギーにたいして不信を表明する。それらは、ただ単に戦線を硬直させ、危険な二者択一の状況をもたらすだけであるからである。

おそらく、政党の本質と機能に関する彼の見解が、政治における理念と現実についての彼の考え方をよく表明していると思われる。すなわち、次の言葉がこの点を明瞭に示していると思われる。「私にあてて、ある保守的な指導者が手紙をよこした。彼は、私がどうしてドイツの民主主義政党のような無思想な政党に結びつきうるのか、理解しかねるというのである。私は彼にこう答えた。理念とか思想は私には多すぎて余りあるくらいである。理念とか思想のためには私は政党を必要とはしない。私は、政党にたいして事態の現実的認識、統治しうる能力、そしてまたそれによつてのみ人を統治しうることができ、人が政党からそれのみを喜んで期待することができるところの健全な人間悟性を要求するのである。」[1]といつている。民主主義にたいするトレルチの把握もまたイデオロギー的でなく、プラグマティックである。「観察者の書簡」の初めの頃に、すでに純粋な民主主義の原則を、ドイツにとつて唯一の救済の道と指摘し、それは国家形態のいかんにかかわりのない原則とするのである。

「民主主義は、もはや純粋な政治的、道徳的原理問題ではない。また民主主義思想の道徳的要素を、国家と社会にたいする彼らの要求のために、役立てようとする階層の闘争手段ではありえない。民主主義は、単なる教義や純理論からぬけ出して、純粋にプラクティカルな必要になつたのである。……それは純理論的産物ではなく、実際的、社会的な、戦争と敗北によつて露呈され、有効になつた事態の表現なのである。」[2]といい、さらに民主主義の保守的性格もまた強調される。「今日のドイツの民主主義、もしくは民主主義的な国家体制は決して革命の結果ではない。それはむしろ主たる部分において、革命にたいする対抗物であつた。それはプロレタリアート独裁からの救いの神であつた。独裁ではなく、右からの復古ではないものが、今日保守的原則を構成するのである。」[3]この思考は、単に保守主義者の陣営と和解するための方便としてとられたのではない。その最も深い根拠は、文化哲学者であり、文化的政治人としての彼の洞察と熱望のうちに潜在しているものである。すなわち、彼にとつては安逸な生活ではなく、まさに法的秩序の確立が問題なのであつた。彼は、歴史における革命のもたらす高い代価を認め、伝統の断絶の危険性を知り、古いものと新しいものとの綜合の必要をよく認識していたからである。トレルチにとつては、その綜合は政治的世界の関心事にとどまらず、当時の彼の最も独自な研究課題でもあつたところの、文化綜合（Kultursynthese）を求めようとする願望と衝動に対応するものであつた。かくしてトレルチは、文化的領域においても、デモクラシーの本質と形式が、文化的遺産の保持と拡大に充分に結合しうることを説くのである。

トレルチの政治に対する姿勢について、マイネッケは次のように述べている。「私は彼との会話の中で、しばしば次のようなことを認めた。彼がまさに大規模な壁画スタイルで自己の見解を展開させ、ばらばらの事物を、確固たる因果の関係につなぎあわせてみせるのにたいして、さしあたり今何をなすべきかという疑問にたいしては、ただ肩をすくめて拒絶するだけであつた。たしかに、彼には大きな意味での実際的な意志の衝動が欠けてはいなかつたが、しかし、事物の動きにたいして、直接影響を与えようとする衝動は欠けていた。」[4]と。

また別のところでマイネッケは「トレルチの友人たちは、彼の死によつて、自分たちの人生を導く最も強い燈火を失つたように感じたのであるが、これらの人々が集つて彼の印象を語りあうとき、かれらはしばしば次のことを告白せざるを得なかつたのである。すなわちそれは、トレルチが積極的に主張しようとした根本思想および目標は、表面にあらわれでている彼の豊かな洗練された歴史的見解にたいして、何かしつくりしないところがあるということ、トレルチの力強い言葉は、結論に至つて彼自身の意欲と思想とを明確に展開しなければならないところにくると、急に力を失つてくることが少くないということ、なのである。」[5]すなわち、前にも指摘したように、政治はトレルチにとつては、権力をめぐる闘争であつたり、友敵の関係にあるのではなく、妥協の技術なのであつた。と同時に、一九世紀以来のドイツ市民社会の特徴の一つとして一般に指摘されているところの、文化一般のすぐれて近代的な性格と政治社会体制のすこぶる前近代的性格、正しく認識された目的と、その目的に到達するための手段との間に、伝導管になるべきものの欠除、文化的教養階層と政治指導層との間の亀裂、この特殊ドイツ的状況が、トレルチにおいてもまた例外なくその片鱗をみせているのである。しかし、いずれにせよ、少くとも第一次世界大戦の勃発以後は、彼の政治的関心とその行動については無視するわけにはゆかないものがあろう。同時代のマイネッケが、歴史の一般的・集団的権力に関する知識と、社会・経済学的知識にもとづいて、激動する階級闘争に警告を発し、社会改革と、それに伴つて新たに創造された倫理的、人間的、民族的価値を内的に創造するという使命を担い、それへの実現に努力したことを認めうるならば、さらにまたウェーバーが、同時代の政治問題に積極的に関心を寄せ、そのドイツ的解決に学者的良心を以て没頭したことが評価されるならば、トレルチに関してもまた、当時代の講壇政治家の代表者たちの間に、一つの位置が与えられてしかるべきであろう。

最後にトレルチの「政治的遺言状」ともいうべき彼の論説から引用してみたい。この論説は、一九二三年三月にイギリスのロンドン宗教研究協会、オックスフォード大学およびエディンバラのニュー・カレッジ等で実施の予定であつた講演の原

稿であつたが、同年二月、彼の死によつてそれは果されなかつたものである。すなわち、「歴史主義とその克服」(Der Historismus und seine Überwindung. Fünf Vorträge. Eingeleitet von Friedrich von Hügel-Kensington. 1924) という表題のもとに、彼の死後収録されている。トレルチは次のように指摘する。「われわれドイツ人の間には、妥協といえばおよそ思想家の犯しうるもつとも軽蔑すべきもの、もつとも卑俗なるものと考えられている。ドイツでは、『あれか、これか』という徹底した非妥協主義的なラディカリズムが要求されているのである。そして、この気持は、東の方へむかう程ますます強くなつている。あらゆる徹底した非妥協的なラディカリズムは、不可能なことへ、そしてまた破滅へと導いてゆくものなのである。」といい、さらに「一切の生命そのものが、全く動物的な生命も、肉体と精神とをもつ生命も、これを形成し、統合する諸々の力の不断の妥協なのである。まず生命と妥協とがあつて、その中から、宗教的なまごころや宗教的敬虔性の至高の境地が形成されてくるのであり、その後この宗教的境地は、彼岸をさし示すのである。その彼岸においてのみ、それは完全に解放されうるのである。単に生存のための闘争、政治的・社会的自己主張のための闘争のみならず、なによりもまず自然的生命と精神的生命との闘争、これが人間の担う運命なのである。その精神的生命とは、自然的生命の中から現われでてきて、自然的生命に反抗しつつも、あくまで自然的生命に拘束される状態をまぬがれることができないものなのである。もし全歴史の本質が妥協であるとするならば、思想家もその妥協をまぬがれることはできないであろう。」[6]という。そして、この講演のイギリス版では次のようにいう。「ここあなた方のイギリスでは、妥協の原理はいささかも軽蔑されていない。政治的経験と、経験論的思考体系の影響は、ピューリタンの始祖からトム・ペインやベンサム、ルソーの学徒に至るまで、あなた方にも、決して非妥協的思想にこと欠かないにもかかわらず、あなた方に一つの別の態度を与えたのである。純粋に経験的な哲学にたいする一つの自然な反撥にもかかわらず、私は、あなた方の文学の特に魅力的な教訓に富んだ部分として、これを感ずるのです。それゆえ、私にとつては、妥協の原理への私の帰依を、あなた方イギリス人に力説することの方が、私の国でそれをす

るより容易なのであります。人は、妥協を利用するに際して、うつろい易い瞬間にあると思われるところの方法にたいして、あるいはまた、困難な状況下にあつて、きわめて安易な方法と思われはするが、単に瞬間のものとみなされるような方法にたいして、早まつて譲歩してしまうことには極力警戒しなければならないことは当然であります。そして、私はくりかえしていうが、われわれが理想を放棄することには敢然として反対しなければならない。理想を眼前に浮べている場合にのみ、われわれは希望を持ち続けうるのであるし、また冷い暗い世界のただ中にあつて、よりよい未来を求めて努力もなしうるのであるからです。[7]」といつているのであるが、トレルチにとつて、その発想の深淵にはキリスト教的信仰が伏在していることはいうまでもない。「キリスト教は、これを全体として眺めるとき、神国というユートピアと、つきることのない現実生活との、大規模な、その度びごとにあらたな形で行われた妥協であります。そして福音書自体は、鋭い本能を以て、この世の終末を念頭において説いていたのであります。[8]」と。トレルチの政治的関与を促した時代は、政治的にも社会的にも緊張の連続の時代であり、二者択一への衝動を内的に包蔵した危機の時代でもあつた。そのゆえ、彼の政治的発言に、しかも妥協の原理を真摯に説こうとする彼の立場に、傾聴しようとする人々の少なかつたことは否みがたいことであつたであろう。しかし、それにもかかわらず、彼が健全な人間悟性のための弁護と、その勇敢な理性を、ラディカルな非合理主義に対置させ、走馬燈のごとく過ぎゆく瞬間を、その歴史的パースペクティーブにおいてとらえ、ワイマール共和国の国家的正当性を主張した態度は広く認められ評価されるべき性質のものであろう。

本稿を終るに当つて、「観察者の書簡」に附されたマイネッケの序言の第一句を掲げておこう。「われわれの民族の怖るべき運命を精神的に把握し、自己の魂のあらゆる震撼において、批判的冷静や、無条件の誠実や、生命の永遠な導きの星にたいする深い信仰を、確実に主張しえた現代のドイツ人のうちで、エルンスト・トレルチこそはつねにもつとも巨大な人物の一人として高く聳えるであろう。[9]」

(1) Der Kunstwart XXXIII/17 (1. Juni 1920) S. 215, in: Eric C Kollman; a. a. O. S. 309.

(2) Ernst Troeltsch; Spektatorbriefe, S. 305 f. および S. 307

(3) Der Kunstwart XXXIII/2 (2 Oktoberheft 1919), S. 49 f., in: Eric C Kollman; a. a. O. S. 310.

(4) Friedrich Meinecke; Einleitung zu den Spektator-Briefen, in: Zur Theorie und Philosophie der Geschichte, 1959, S. 382.

(5) Friedrich Meinecke; Ernst Troeltsch und das Problem des Historismus, in: a. a. O. S.S. 367-368

(6) E. Troeltsch; Der Historismus und seine Überwindung, Fünf Vorträge, Eingeleitet von Friedrich von Hügel Kensington, 1924 大坪重明訳「歴史主義とその克服」一五九頁参照。

(7) Ernst Troeltsch; Christian Thought, its history and application, London 1923, p. 166 f., in: Eric C. Kollman; a a. O. S.S. 318-319 および Hans Kohn; ibid. p. 323.

(8) 大坪訳「歴史主義とその克服」一六〇頁参照

(9) F. Meinecke; Einleitung zu den Spektator-Briefen, in: a. a. O. S 379